

第 116 回 『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

コロナウイルスで大変な時なのですが、湯浅さんの主張は、コロナウイルスへの対応にも示唆を与えてくれると思います。コロナウイルスに感染した人への対応も同じのようなところもあるのです。

湯浅さんは、多様性と共同性は、相性が悪いと言っています。

それは、多様化は世の中を細分化し、分断し、生きづらい人を増やす方向にも働きうるからだということが理由です。多様化とは「みんなちがう」ということです。

よくわかるように言えば、極端になります、国の違う人同士の集団のようなものになります。「みんないい」と言って、外国の文化の違う人の存在を認めるということとはできるでしょうが、そこで、どうやって「共同・協働」するのかと言えば、それはとても難しいことで、簡単でないということを述べています。

そこで、湯浅さんはとても分かりやすい例を挙げています。家族旅行に例えて説明をしているのです。

父はハワイに行きたいと言っている。母は温泉に行きたいと言っている。姉はディズニーに行きたいと言っている。私はどこにも行きたくないと言っているとする。さて、「みんなちがって、みんないい」から導かれる結論は？というと、みんなそれぞれ行きたいところが違うのだから、バラバラにそれぞれ行きたいところに行けばいいということになります。「みんなちがってみんないい」ということは、そこまでの結論しか導き出すことができないのです。しかし、それでは共同性は成り立たないのです。社会は集団で構成されているので、「みんなちがってみんないい」ということでは限界があるということになります。

多様性は、自動的には共同性には至らないということなのです。そして、湯浅さんは、むしろ、多様性は本来、共同性に反しているものであると言い切っているのです。そして、多様化するということは、つながりにくい社会を作っていくということでもあると述べているのです。

「みんなちがってみんないい」という詩の一節は、とてもいい詩の一節なのですが、この一節だけが独り歩きしてしまうと、この社会においてはよい方向には向かわないのではないかと思うのです。では、どういう課題が考えられるのか、次回それについて述べていくこととします。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。